

秋田市道川神社（旧愛染堂）の絵馬

嶋田 忠一*

はじめに—先行文献二編について—

1 道川神社（旧愛染堂）

2 道川神社の絵馬

- ・喫煙具を描いた絵馬
- ・挿み絵馬
- ・神社参詣を描いた絵馬
- ・画題絵馬

おわりに

要 旨

○道川神社は、秋田市上新城地区の道川集落にある。神社となったのは神仏分離令以降のことであり、江戸時代には愛染堂と呼ばれ愛染明王を主尊としていた。今日のように不動明王・金剛夜叉明王・毘沙門天の諸像（秋田県指定有形文化財・彫刻／制作年代—平安時代末期）と合祀される形式ではなかったと考えられるものの、しからばどのような組み合わせで、どこに祀られていたかは不明である。この点は新城地区の歴史のなかで解明されるべきものであり、今後の課題でもあろう。

○現在、道川神社には、約44面の絵馬が奉納されていて、これらからは祈願の一端を垣間見ることができる。図柄からは、ほぼ次の四つに大別できる。一つは、喫煙具を画面いっぱい描いたもの。煙草盆に火入れ、灰落とし、煙管を描く。これは願主の所持品と思われ、細部まで描き分けるものが多い。これを煙草断ち絵馬とした。紀年のあるものおよそ9面を数え、古いものは嘉永2年がある。二つは、挿み絵馬といわれる一類で、挿みの形式は夫婦で挿む姿を表したものから、子供が一人で挿む図、母子が挿む図などさまざまである。また、鏡餅を供えて挿む図、飛雲御幣を挿む図など、願主以外の表現にも興味深いものがある。この絵馬は9面あり、明治24年以降のものである。三つは、願主が神社に参拝する場面を描くもので、祈願成就を意図したものが多い。いわゆるお果たしにあたるものである。これは7面あり、挿み絵馬同様明治20年以降の奉納品である。四つは、画人の描いた絵馬で、一般に知られた有名な故事にちなむものや、歌舞伎の評判物、和漢の典籍、武勲・英雄譚などに取材したものである。この類には、池の菖蒲に鴛鴦を表したもの、金剛力士図、神功皇后と武内宿禰、山中金時図などがあつた。江戸時代のものに多い。天保13年銘が古いものであつた。

○道川神社の絵馬の特徴は煙草断ち絵馬が多いことである。これは愛染明王の本願と関わることで、愛欲を断つ、すなわち愛欲は男女の情欲だけではなく心の迷い・執着を断ち切ることができるよう忿怒形となって助けるということに由来する。しかし、明治以降は汎用性のある挿みや社参の図柄に変化してきた。こうした変化は絵馬奉納が、画人を含む一部の人々の手から開放され、大衆化・一般化してきたことを表している。

1. はじめに—先行文献二編について—

秋田県内の絵馬に関する知見は、およそ市町村教育委員会発行の文化財収録や自治体史誌などを通してまとめられてきた。そのほかには今年本荘市史神社仏閣調査報告書としてまとめられた『本荘の神仏像』のように、特定地域の社寺等悉皆調査の際に、新たに書き加えられることから、こうした発掘方法も一つの有効な手段となっている。いずれにせよ絵馬の研究にとってはまず県全体としての把握調査が急務であるといえよう。

ところで、こうした新知見の積み重ねが続けられる一方、県内を通覧したものとしては、太田和夫氏による本研究報告第3号の「秋田の絵馬について」¹⁾のほかはあまりなかったように思われる。太田氏の調査は、絵馬展のための緊急的な所在調査と断りながら、14市町村56社を調査し286面を確認したものであった。その成果は大略、次のようにまとめることができる。

〔1 奉納年記からみた絵馬〕では、秋田県の最古の絵馬として元亀3年(1572)銘・能代市釣瀧神社蔵「裸馬遊泳図」をあげ、赤外線写真にもとづく描法を解説するとともに、以下、貞享2年(1685)銘・能代市上母体八幡神社蔵「墨鷹、白鷹図」、元禄8年(1695)銘・鹿角市芦名神社蔵「神馬図」、元禄9年銘・大内町八幡神社蔵「松に鷹」、正徳5年(1711)銘・秋田市豊岩八幡神社蔵「神馬図」、明和3年(1766)銘・角館町神明社蔵「花下美人図(小田野直武筆)」などを例示する。また、紀年の明らかなものは182面あり、それらを年代ごとに分類すると幕末期(1800~1867)27,5面、明治期(1868~1889)20,3面、同(1890~1911)26,9面などとした。次いで〔2 画人の描いた絵馬〕では、画人の手になる図柄には、動物を描いたもの・おめでたいもの・歌仙絵・風俗図・武者絵などと多様であることや、絵馬の画面や背に落款や印章を押すものが多いことから、祈願の対象とは別の画家自身の自己表示であり、画家の社会的身分を示すものという。さらに、江戸時代の画人は軸物や障屏画に対するのと同様に、神社の絵馬制作に力を注いだとし、角館町の神明社や秋田市の日吉八幡神社、鹿角市の月山神社などは、さながら絵の展覧会場であるともいうのである。おわり

の〔3 形式上特殊な絵馬〕では、生馬献上に始まり木彫馬形、板立馬、絵馬という史の変遷説からすれば、筆で描く以外の手法で作られた絵馬を特殊とするには語弊があるやも知れぬとした。そして板地に墨や顔料で描かれたもの以外の、異質な材料を使った絵馬を仮に「特殊」と呼び、漆絵馬・浮彫絵馬・貨幣を利用した絵馬・金属を利用した絵馬などの用例を挙げた。

以上のことがそれぞれに、今日までの成果を追加し、検討することは意義あることではあるが、本稿では及ばないことである。むしろ筆者は、今少し太田氏の画人研究の一環から漏れた部面や視点を加えることが全体把握には有益と考える。その意味では、高橋正氏の「五城目町高性寺の大根絵馬」²⁾は、きわめて有益であった。高性寺は南秋田郡五城目町下夕町の名刹である。天養元年(1144)には森山の坊ヶ沢に建立されていたという。そののち普門寺台を経て現在地に移ったといわれるが、開基は不明のようである。江戸時代は佐竹氏の祈願所の宝鏡院末寺であった。今は真言宗智山派(古義天台宗)に属し、御本尊は大日三尊(中尊・大日如来、脇侍・不動明王・愛染明王)となっている。ほかに歓喜天や弁財天、五城目町の朝市の守護神でもある大市比売命を祀る山王堂、また境内には元亨年代(1321~1323)の板碑や樹齢五百年の榎などがあることでも知られている。高橋氏の報文は、この高性寺本堂内に掲げられた、大根を描いた絵馬を扱ったものである。以下はその約記である。

〔1,問題の所在〕では、絵馬に関する研究史とともに御住職の語る歓喜天伝承を紹介し、大根絵馬についていくつかの問題提起をするとある。

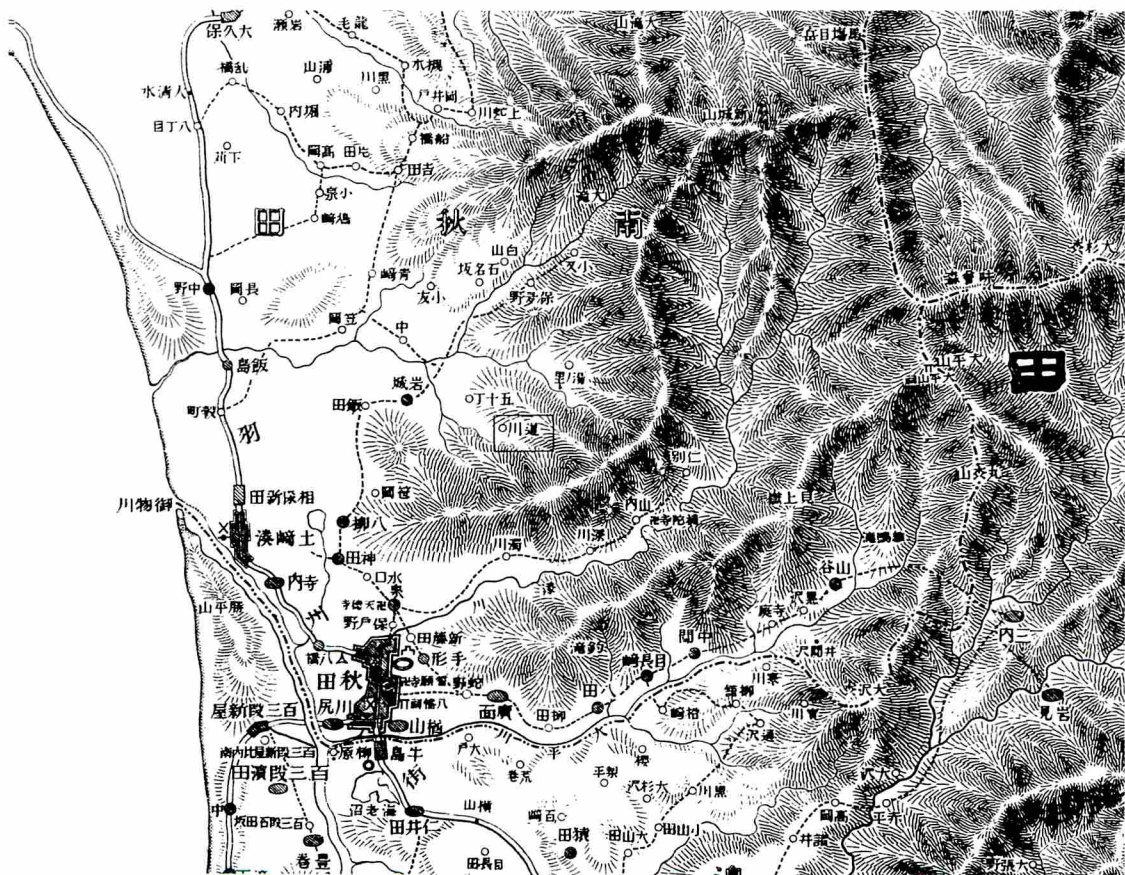
〔2,お聖天様の伝承〕は、好色な神・歓喜天がいかにして観音様との誓願に至り、人々の願いを聞き届けるようになったのかとう伝承の記述であり、ほかには月毎の16日が大根を食べてはいけない日であるという伝承を紹介する。〔3,高性寺の絵馬〕では、まず大根絵馬の絵柄に注目し、・二股大根(まっか大根)を二本描いたもの・二本のうち一本が二股であるもの・二本とも普通のものの三種に分けられること、大根の置き方についても・まっか大根は交差して描かれる傾向がある・普

通の大根は交差させたものと、並べたものとが混在するという。このほか、高橋氏が「動的な構図」という、男が大根を担いだり、背負ったり、引き抜いたりする絵柄も紹介したうえで、これを、大根奉納までのプロセスで、こうした苦労があったということをお聖天様に知らせ御利益を期待せんとしたものと推した。〔4, 考察及び問題提起〕では大根を描いた絵馬には、「本来歓喜天に大根を供えるという密教の秘法が、庶民に伝えられた一つの形態として存在する側面と、夫婦和合を願う意識のよりストレートな表現として存在する側面との二つが混在するのではないか」と結んでいる。

ところで、これは一般的な理解にすぎないが、大聖歓喜天、略して歓喜天・聖天は、魔性の集団の主の意味といわれ、像容は象頭人身の立像で男女二天が抱擁する姿の像が多い。このため秘仏とされることが多かったのは県内でも同様なのではないか。その秘儀性がいかにして崩れたのか。リストでは、文久2年(1862)が、紀年の古い一面(普通の大根を並べたもの)となっていて、それ以外のほとんどが明治期であることは注目すべきこと

である。また、聖天を祀る堂宇などには違い大根や二股大根が多いものの、単に大根を描いただけの絵馬奉納は聖天に限ることではない。こうしたことから大根の絵柄すべてが聖天にかかわる絵馬とするのは早計のように思われるのである。さらに御本尊との関わりでいえば、いかにして御聖天様がもてはやされる位置を占めるようになったのかということである。つまり高性寺が檀家や周辺の人々とどう関わってきたのか、社会はどういう状況であったのかという問いでもある。絵馬研究は図柄を中心として庶民の祈願や信仰の諸相を探ろうとしてきた。しかし、太田氏があとがきで述べるように、「絵馬研究が『歴史的発展のなかに位置づけていく研究』³⁾であるならば・・・(略)・・・広い視野で調査していく必要がある」とするのはきわめて妥当なことである。

以上、筆者の理解の及ばない部分や、多少の疑義はさておき大事な記録として二編を掲げた。特に、高橋氏の調査記録は、絵馬49面のリストのうち大根を描いたもの45面あり、さらに厳密に大根を供える図柄に限ると37面を数えるというものであり、本稿をなすうえで参照すべき先行文献であっ



◆新城地区図・輯製二十万分一図(明治初期・部分) <平凡社版『秋田県の地名』付図より>

たことを付言しておく。

本稿は、上新城道川の道川神社に奉納された絵馬調査をまとめたもので、まず道川神社と愛染明王を紹介し、次いで奉納絵馬の特徴を数点取り上げた。そして終わりには絵馬からみた愛染明王の信仰の形態と変遷について若干の私見を述べたものである。

2. 道川神社(旧愛染堂)

道川神社は秋田市上新城道川字相染の山地内にある。創建や由緒は不明な点が多い。江戸時代には真言宗愛染院があり、愛染堂と不動堂をお守りしていたという。道川神社の呼称ならびに祭神〔伊邪那岐命・伊邪那美命ほか三柱〕などは明治4年(1871)の神仏分離による変化とされている。

昭和6年の『我が郷土』(上巻・謄写刷)では、

「○社格 村社指定神社

○所在 秋田郡道川村愛染六番地

○祭神 伊邪那岐命・伊邪那美命・保食大神・天照大御神・少彦命

○縁起 弘化3年(1846)巳二月吉日写」

と記すほか、明治42年5月にはつぎの無格社五社<神明社(深田山根)・三嶽神社(入ヶ沢)・相染神社(夏張)・神明社(家ノ下)・三嶽神社(堂田)>を合わせ、それまでの愛染神社を道川神社と改称す

ることになったともいう。なお同書引載の縁起は次のとおりである。

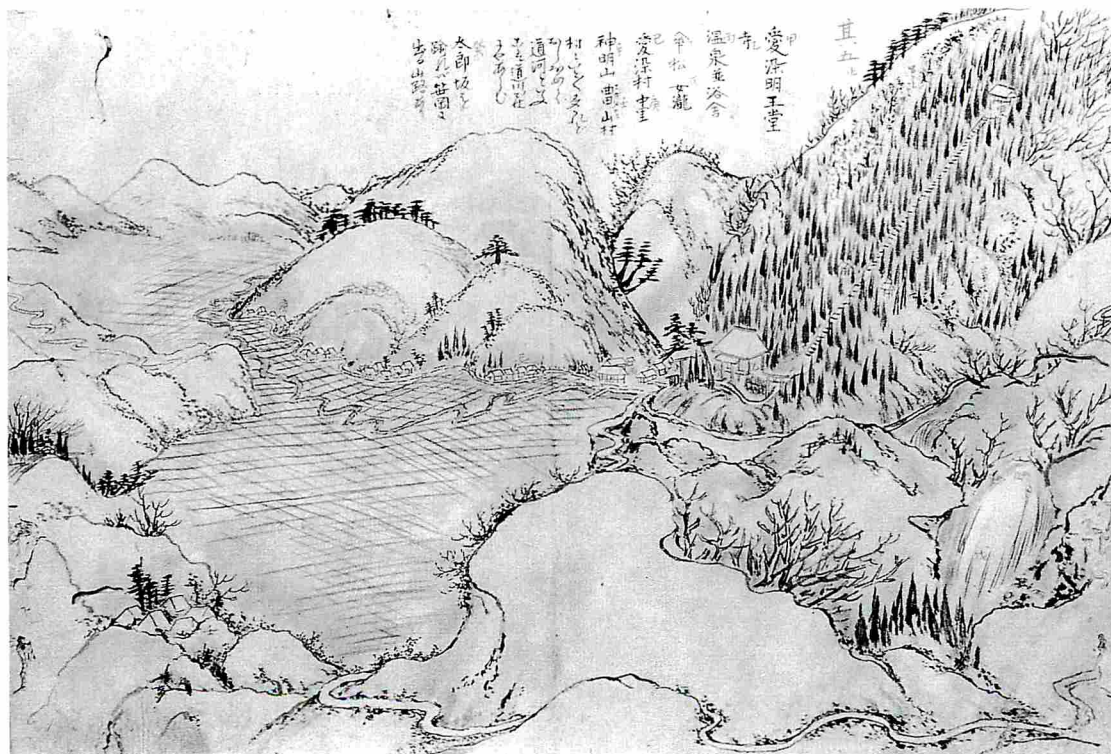
「出羽国秋田郡新城庄道河村

愛染院縁起

本尊 愛染明王 前立 毘沙門天王
金剛夜叉明王 不動明王

中尊の二尊、首より秘仏にて拝し奉る人なし。ここに湯沢山乗副寺七世存心如月和尚ある夜何々の告により、彼の尊像再興の願望頻りにして愛染院門主如意山幢寺宝鏡院の法印と会談して宝室を開きて拝し奉るに尊体朽損し給う。正徳四甲午再興せり。依って人々参詣して曆数久しく秘仏にてましますことを感激せり。愛染明王御ぐしに獅子を戴せ給う事、衆生我を念ぜば現世にてはもろもろの願を叶いせしめ、その上諸人愛敬を守り、後世には仏果に至らしめん。我戴ける獅子の上に衆生を戴てその念ずる衆生を守らんとの御誓願難有事ともなり。此の因縁にて堂舎に獅子を回法せしむるとなり。当院にも獅子一頭運慶作なり。慈覚大師御草創は人皇五十三代淳和天皇の御宇天長年中なりと。彼所の景地、無双川上に大瀧あり。此の流れを弘川と言えり。垢離かき場なり。于時人皇百十六代今上皇帝御宇寛保元辛酉まで九百十六年なり。

初新吉辰書 加藤政貞



◆道川村愛染堂の図〔菅江真澄著『勝地臨毫 秋田郡四・其五(重要文化財・辻兵吉氏蔵)〕<須藤功氏撮影>

抑々此由来を書かし奉度数年心に掛る。その節に至らず諸人の言い伝えのみにて慈覚大師の御作とばかり聞く。乗副寺和尚の再興とはいえどもその年月の委しき事をも知らず月日をむなしくくらせしおりからに今年今月六日時を得たりや。寺内村古四王尊神の社職鎌田氏の御宅にて子息但馬守殿その方日頃尊心なし奉る明王の縁起なりと見せられ、誠にこれは数年心にかくる所大願なり。願望成就の時至りぬるとおしいただき副写し当社に奉納して御参詣のもろ人此の縁起を拝し奉り往古旧社のいわれを深く思い、御信心の御志日に増あらたに願うのみ。

于時人皇百十九代今上皇帝御宇

安永三甲午年迄凡九百四十九年になる。亦湯沢乗副寺如月和尚再興より今年迄六十一年になる。抑慈覚大師上申奉るは僧名圓仁と申し人皇五十四代仁明天皇御宇承和三丙辰年三月入唐なされ同十四丁卯年十月帰朝天安六甲申年正月十四日みまかり給うなり。同八丙戌年慈覚大師と謚せらる。

願主 間杉伝右衛門

昭盛

安永三甲午天 九月吉旦

大願主主空圓 拜」⁴⁾

これまでの歴史学上の成果⁵⁾によって紹介するならば、この新城は、鎌倉期には新庄とも書き、新庄沢内とも称した、新城川流域に開けた広い地域をさすものようである。江戸時代から明治22年までは道川村や石名坂・白山・保多野・小又・中・湯ノ里・五十丁の各村名で知られ、明治22年～昭和29年までは南秋田郡に属した。昭和29年には秋田市に合併し今日に至っている。

この地域の歴史的な資料は少なくない。まず挙げられるのは道川神社所蔵の四体の尊像(愛染明王座像・金剛夜叉明王座像・毘沙門天立像・不動明王立像)であろう。いずれも秋田県指定有形文化財(彫刻)である。愛染明王像が最も劣化激しく、また膝前以外は全て後補というものではあるが、他の諸尊同様平安時代末期の作である。愛染明王の「愛染は愛欲貪染で、人間が愛欲におぼれるのをそのまま菩提の心に変えるはたらきをする明王」



◆愛染明王像（現状は首部脱落状態にある）

で、「像容は獅子冠をいただき、三面六臂で、手には金剛鈴・五鈷杵・弓・矢などをもつが、愛欲を表現するために全身を真紅にいろどる。また、後には紅焰にもえる赤い日輪をせおい、蓮華の台座は宝瓶にのるのがふつうで、すべて座像であるのも一つの特徴である。外相は忿怒の形だが、内相は敬愛を秘め、解脱をはかる」⁶⁾ものとされる。ほかに、四天王の一つで北方守護の毘沙門天、金剛杵の威力で人の心の内外の障害を夜叉のような力で粉碎する役割をもつ金剛夜叉明王、それに悪を断じ善を修し真言行者を守護する役割をもつ不動明王があり、それぞれがこの地域とどう関わってきたのか必ずしも明らかではない。これら四尊は当初から同じ堂宇に奉祭されていたものとは考えにくく、上新城地域の字地名や伝承、遺称地などに照らして、何個所かに分かれていたものと思われる。このほか石名坂にあった高倉山龍泉寺(大正8年頃能代市に移る)の舞楽面・二の舞面(腫面、咲面)で徳治2年(1307)銘がある。旧龍泉寺蔵品には、この他金銅薬師如来立像・円空作十一面観音立像があり、いずれも県指定文化財である。また、阿彦館や岩城館を始めとする城館址・跡や館主の問題⁷⁾等もある。しかし、平安末期から鎌



◆愛染明王像の六臂部材・室町期



◆同上膝前部（当初材）・平安末期

倉時代にかけての文化財がこの地域の歴史のなかでどう意義付けられているのかは、門外漢の筆者には知る由もないことではある。伝承についても同様のことがいえる。その一つは、愛染明王を祀る堂社というものは現在地よりもっと高い山上に位置していて、港に入る船の目印になっていたということである。江戸時代の記録である菅江真澄の『勝地臨毫（秋田郡四）』に載る同社の位置はほぼ現在地に比定できるから、これよりさらに高い山上にあったところの伝承となるのだろう。しかし港というのはいわゆる土崎なのか、新城川口の穀丁あたりだったのかはよくわからない。ともあれ、ここで話題にすべきは単に愛染明王の占める位置ではなく、新城地域全体の中でどう機能していたのかということになるのだが、ここでは立入ることはできない。

以上のようなわけで、道川神社には四体の尊像が祀られていること。なかでも愛染明王像は江戸時代には愛染堂の主尊として、藩主や藩士の尊崇も深かったと伝えられてきたこと。道川神社の前身はこの愛染明王堂であること、などにまとめることができよう。

3. 道川神社の絵馬

道川神社の絵馬は44面を数える。それらは概ね、喫煙具を描いたもの、神社に参詣する図、手を合わせて神を拝む図、伝統的な画題を踏襲した図に

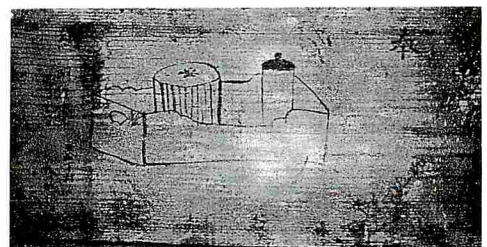
分けられる。以下に、図版を例示しながら、それぞれの図柄ごとの特徴を略記する。なお、個別の絵馬の詳細は後掲の整理表にまとめた。

喫煙具を描いた絵馬

図版1～7で知られるように、喫煙具〔煙草盆に火入れ・灰落し・煙管の三点セット。以下同じ。〕を大きく描いた絵馬である。図版2を除いた全てが一口である。図版2は、同形の煙草盆ながら二口を大小に描き分けているように見えることから、男女一対を表しているものと推測できる。

喫煙具は実際に奉納者の所持品を表すようで、細部がよく知れる。形状や材質のほか図版3の火入れのように染め付けの絵柄までが描かれている。これにより、祈願者の喫煙具を特定する働きとともに、実物を神前に直接奉納する代役としての役割がかなえられるものであろう。

これらの絵馬は、県内ではあまり報告例がなく比較はできないが、道川神社では幕末期の弘化・嘉永・文久年代が古い例になる。江戸時代の奉納例は、煙草法度などとの関わりがあることから、煙草断ち絵馬としたが、明治期の奉納例にも同様のものがあり、根強い心願であったことを思わせる。ただし、明治期には喫煙具単独の絵柄は次第になくなり、図版8・9・10のように神前端座図や拝み絵馬などの一部として取り込まれるようになっていく。特に8は、湯飲み茶碗とも猪口とも見える器を前に置き、腰差し煙草入れ（胴乱型）を左腿に立て置くもので、祈願内容は判然としない。同じく9は、母子の端座姿の前に喫煙具を描く。煙草好きな父親の煙草断ちを母子が祈願したものだろうか、判じがたいところがある。10は、飛雲御幣すなわち神をを拝む姿で、よく知られた図であるが、親子3人が一心に拝む目的は、その前に置かれた煙草盆が物語っている。このほか、下図のような素朴な線描きの煙草盆もある。これは整理表[44]の「神功皇后・武内宿禰図（文久



3年銘)」の裏面に描かれたもの（[45] 明治10年銘）であるが、戯画なのか、わざと秘めようとしたのか、わからない。

拝み絵馬

神頼みという言葉がある。拝み絵馬は文字どおり、いつもこうして拝んでいるという、その姿を具体的に表現したものである。これは心願を描いたものでもあることから、絵柄からは具体的な悩みや心痛を簡単に知ることはできない特徴がある。この点はいわゆる小絵馬にあるように、直してほしい部位・悪い部位を描いて神前に奉納する形態とは趣が異なる。そして、見方を変えると、この図はどんな願いにもあてはまる汎用性を持っているといえる。そのためか、拝みの図の中に、キーワードとなる物を描いたり、特に念入りに細部を描くなどして、神にそれとなくわかってもらおうとしたのである。たとえば、女性の着物姿を描くなかで、裾が割れて襦袢などをのぞかせ、しかもその柄や模様などを細々と表現する場合などは下の病を表すというふうである。

拝み絵馬は、非常にめずらしいもののようにいわれているが、実はそれほどでもない。本県の場合全体的な把握はできないが、隣県では一応の調査がされている。なかで、宮城県の調査報告書によると、・調査対象市町村数71・調査寺社数2544・調査絵馬数5613となっている。このうち、同書掲載の整理表中から拝み絵馬を抽出してみると、301面あった。これを奉納年からみると、江戸時代の紀年銘（紀年銘なしや不明のものを除く）は、文政11年・弘化2年・嘉永2、5年・安政5年・文久元年の6面だけで、他は明治期が圧倒的に多く、大正期・昭和期にも引き続き奉納されることがあったとわかる。

道川神社蔵の拝み絵馬は10面ある。俗に左向きが普通といわれるが、19の鏡餅奉納女拝み図は、右向きである。これを含めて、女が一人手を合わせる図は3面、男が一人の図は2面、男女二人の図は1面、親子三人の拝み図は3面、母子の図は1面という内訳である。この中には夫婦が一心不乱に、拝殿の外から拝む図とともに人形を貼り付けるといふ、強烈な印象を与えるものもあった。これは子宝祈願が成就し、女兒誕生を表したもの

か。

神社参詣を描いた絵馬

これは画面の左方に社殿を鳥瞰的に表したり、鳥居や石段、神域を表す森や拝殿などの一部を描き、そこに参詣しようとしている祈願者の姿を描くものである。全7面中、男女図・青年一人図・親子三人図・親子四人図が各1面、母子図3面となっている。幼児あるいは乳児と思われる子供を描くのは子宝祈願の成就と思われるものの、夫婦ともに描かれるのは少なく、女性のみが多い。これは、いわゆる芸者等が、旦那の子を望んでかなった場合の社参と見られる。24は、絵馬を奉納しに行く図であるが、背負った子の初宮参りを表したのか、あるいは道川神社の祭典日なのかは不明である。絵馬を含む奉納品全体の奉納月日を見ると旧6月1日が多い。これは祭典日にあたることから、この日に絵馬奉納習俗があったことをうかがわせる。

画題絵馬

ここでいう画題は、朝比奈三郎や、牛若丸と烏天狗、楠父子桜井の別れ、俵藤太の百足退治、巴御前奮戦、源頼政鶴退治、韓信の股潜り、宇治川の先陣争い、二十四孝、孟母断機、張良と黄石公、高砂、紅葉狩り、蓬萊、太公望、甕割童子、和藤内と虎、熊谷直実と平敦盛など、和漢の典籍をはじめ歌舞伎の名場面あるいは教訓話や武勲・英雄譚など、の古来の評判物に取材した絵柄である。

図版30の金剛力士図（明和3年）を含め7面を挙げた。すなわち、鴛鴦図（天保13年）、神功皇后・武内宿禰図（文久3年）、金時・烏天狗図（明治3年）、飛龍・恵比寿図（明治38年）、浦島子図（紀年銘なし）である。これらは全て画人の手になるものでもある。

4. おわりに

道川神社蔵の絵馬の特徴は、煙草断ち絵馬と拝み絵馬の二類型が集中して見られることである。いずれもこれまでのところ希少例に属するものである。特に前者は、愛染明王の、愛欲を断ち切る本願に由来するもので、人の断ちたいと思う心を忿怒形となって助ける意義と合致する。逆に縁結びに見られる如き祈願は、少なくとも江戸時代の

奉納例にはなかった。したがって、愛染堂であった頃の祈願は、断ち切りたい願いの場として機能していたと推される。また、次頁の表でも傾向は見てとれるがいわゆる画人の絵馬も江戸期に集中し、庶民が願主として明示されることは少ない。

後者の拝み絵馬は、明治以降に多く見られる。つまり、貴重視されるほど古いものではないらしいのである。

本稿は、道川神社一社における、絵馬の所在報告を目的にしたものである。それにより、奉納・祈願の本質的な性格など、絵馬研究上、見逃した点多かったことと思う。しかし、大根絵馬同様、一社に特徴ある絵馬の存在については新たな事例を追加することができたものとする。今日の絵馬調査によると、明治以降の奉納例が圧倒的に多く、同時に庶民層が願主となっていくことが特徴である。いわば新しい流行といえなくもないのである。したがって、絵馬奉納の習俗が近世から近代を通じて普遍的な庶民の信仰や祈願のあり方を示すかのごとき理解は改めて問いなおすべきことがらであろう。そのためにも、社寺ごとの調査事例を増やしていくことが必要なのである。

おわりに、本稿をなすにあたって、道川神社宮司・伊藤二郎氏より多大な御協力をいただいたことを明記し、感謝申し上げます。また、所在調査にあたっては、チャレンジ研修生・館山峰夫（県立粟田養護学校教諭）、児玉知行（浜口小学校教諭）の両先生のお手を煩わした。ここにお礼を申し上げます。

註

- 1) 太田和夫「秋田の絵馬について」『秋田県立博物館研究報告』第3号, pp25-47, 1978年
- 2) 高橋正「五城目町高性寺の大根絵馬」『伝承と文化』第22号, pp107-110, 1992年
- 3) 『絵馬』の著者・岩井宏美氏の絵馬研究の位置づけを引用した文言。
- 4) 『我が郷土』（上巻）
- 5) 『角川日本地名大辞典5・秋田県（角川書店）』、『秋田県の地名（平凡社・日本歴史地名大系5）』などによる。
- 6) 『図説 歴史散歩事典（山川出版社／1979年）』によった。
- 7) 『我が郷土』（上巻）は、加成惣一郎の「南秋阿彦

館址について」（昭和2年5月3日～5日の秋田魁新報に掲載）を載せる。また続けて他の遺跡についても紹介している。長文になるが、以下に掲げた。

「阿彦館跡は土崎港町の東北約三里余を離れた金足、上新城、下新城の三村界にある（中略）。この館の名称に古来より種々あるが、つぎの六通りは、今尚里人のとなへてゐる館名である。

（1）あびこ館（2）小友館（3）新城館（4）

権現館（5）黒川館（6）保多野館

あびこ館と云ふのは、昔時阿彦氏がこゝに拠られたといふので、かく各づけた。秋田沿革史大成下巻故城址黒川の部に「阿彦佐七」、別に「阿彦左衛門」云々と見えるのがすなはちこれである。小友、黒川、保多野などの館名は部落名から出たのだ。つぎに新城館と云ふのは今の上、下両新城、金足の三カ村すなはち二十六ヶ部落は勿論、外旭川村の一部たる笹岡まで、古きむかしはいつでも新城と云い、拡大なる一区域であったので、そこから出た館名である。権現館といふのは往時この館の地域内に権現を祀って居った所から、となへた名である。欺くの如く拡大なりし新城、金足の古代文化を知らんとせば歴史的方面から考察をしても、或はまた考古学乃至は人類学方面から探求しても同地は頗る価値あり、・・・中略（報者。以下同じ。）

昔この阿彦館主へ浦（面潟村字高岡か）の城主から奥方か縁んづいてあったが、その後両主の間に何等かの仔細が生じたものと見え、浦城主から阿館主の方へ戦を挑むといふことになった。然も其の攻軍路は国見長根（豊川村字大街道の中か）に上って新城一圓を瞰下し、それから黒川字揃へ町（今の暫町）で軍勢を整へ「コソ＝澤一今の小敷澤」からひそかに忍び阿彦館の動静を窺ったといふことである。然もこの時に於ける糧食といふ糧食は何れも藁もて編みし呟に入れ（シゲアピラ）ー（死骸平か）から長根づたひに東方なる字阿彦澤へと進入したので今猶その面影の一つとして「呟澤長根」といふ地名を存してゐる。當時館麓の阿彦沼中には大蛇が居つたので、大蛇は自己のくれまで安住せる地域内の館をば浦の軍に陥落せしめためないといふ所から、遂に一策をめぐらし、自体をば城の周囲へ七回半搦み廻し、朱の如き下腹を浦の軍士へ見せしめて盛人に浦軍の恐怖心をそゝったといふことである。そこで浦軍では千挺の刀を其の沼中に投棄すると大蛇は黒金（鉄の意か）の毒気におそれて城の周囲にからだをからみ廻すことは、出来なくなるといふことを案出し、これが防策として千挺の刀を沼中に投入した。茲に於てか大蛇の出動は全く不可能となりしのみならず、いままで難攻不落ととなへられた該館も遂に没落の悲運に接することになったといふことである。かゝる縁因のためにかは知らないが爾來阿彦沼の附近に棲息する大蛇は勿論小蛇といふ小蛇に至るまで、いずれも皆類に刀鐔のやうな環がはめつて居つたといふことである。ところが、また里人の間に往々次のやうな古傳説を

なすものがある。曾って浦の城主が没落の際愛妻は懐妊中にて辛くも岩城館主たる新城岩見守に救命せられ、わびしき年月を送って居つたが、妻の没後、息は岩見守の菩提寺たりし福城寺より救護を受けることとなったといふことである。

福城寺過去帳によると、

雲岩妙祥信女

元龜元年庚午五月七日

浦村兵部妻

といふ法號が見ゆるの外尚

照巖全善善士

永録十一辰九月四日

三浦掃部之助

鼎巖宗周信男

永録十二巳九月三日

三浦逢之助

云々と法の名や紀年なども見ゆる。顧ふに永禄十一年は正親帝の紀年で（皇紀二二二八）昭和二年の今日まで、實に三百六十年、即ち浦村は浦大町或は浦横町の略であつて、兵部は兵庫の誤書せるものではなからうか。そしてまた掃部之助といひ逢之助といひ、これ等は當時兵庫の妻の看族乃至は家臣として浦村兵部の妻へ附随し來たものではなからうか。切に諸彦の御教示を仰ぎたい。・・・中略・・・

館地の南端には館主の守護たりし、二間四方位の観音社址がある。社址の入口の左右には、その状如何にも盛土をしたやうな二つの森があつた。（森と森との間一間半位なりしと）里人この森をば往時の鳥居跡といつてゐる。館主の祈願所としては秋田寶鏡院管下に属したる高倉山龍泉寺、成正院などがあつたが、龍泉寺は二十年以前に能代港清助町へ轉居し、成正院は三十年前に荒廢した。上小友日野宮社（明治四十五年新城神社（合祀）の棟札に

安政三丙辰四月三十日造立之

高倉山廿世法印實彦 示之

とありしものを、今は、同地の菅原神社へ奉納してある。成正院の墓碑は矢張上小友小字中坪に三基あるが其中の一基に、

明和四天

如意山法師宥明

二十六世亥十月二十二日

と鐫刻したのが見える。・・・中略・・・先年郡誌資料の蒐集せる際金足村高岡神道家上杉久藏氏が所蔵せる古記録の中から次の如く抜録せるものが出品されてあつた。

「前略天文十三年薩摩の住人崇賢の記録に傳へしものによれば阿部阿波守綱末の息中務少輔久末新城阿比古館より館山に移り住せるときに、再興せるものにして、永享六年修驗良光院眞斎坊国清阿闍梨羽黒山より來りて、當社の別當となりし

紀年銘絵馬の種別

年号	断ち絵馬	拝み絵馬	社参絵馬	画題絵馬	俳諧字額	その他絵馬額
延享4					前句付け	
天保3						社額
天保13				池水菖蒲鸞鴛		
宝暦4					前句付け	
明和5				金剛力士		
嘉永2	喫煙具					
嘉永5	喫煙具					
安永2					前句付け	
弘化4	喫煙具					
文化1					前句付け	
文久1	喫煙具					
文久3				神功・武内		講中名額
明治3				金時相撲		
明治10	喫煙具					
明治20			母子社参			
明治21						箆箭長持
明治22						鉄鳥居
明治24		夫婦拝み				
明治26			男児社参			
明治27		男拝み				
明治28			男女社参			
明治29		女拝み				
明治30			社参			
明治31						神前祝儀
明治33	男端座胴乱持ち					
	喫煙具					
明治35						
明治38				飛龍恵比寿		文字絵馬
明治41	喫煙具	娘拝み				
明治42			母子社参			
			親子社参			
明治43	喫煙具	母子拝み				
		女拝み				
明治45			親子社参			
大正2		親子拝み				
大正4		親子拝み				
大正5				雲龍		
大正8				蛇		
大正9				蛇		
大正11				裸馬		

以来後略」とあった。右によって、考ふるとこの館地には、永享六年（昭和二年まで四百九十四年）前後に、この年数の長短に関はらず、館主のおられたといふことが知られる。・中略・如上の私見を披瀝して識考の御無教を仰ぐのである。

△松木台

現在小学校の運動場になってゐる。眺望絶佳、新城沢、下新城方面を眼下に見下し、飯島、土崎、秋田市を展望し得る。晴天の日は男鹿半島もハッキリ視野に入る。元、此處に館越館に居た高田又四郎の住んだところか或は牛馬を修練した所だと云はれ、牛馬長峯の俗称がある。此處からは土師器、石鏃等多く出土する。或はアイヌ、チャンだったかも知れない。標高一〇〇米中腹の台地には、土師器、石器類、朝鮮土器等の出土が多く麓には特に段階をつけ確に人工を加へたと認められるところもある、此處からは峯傳へに阿彦館趾に通ずることが出来る。中腹の台地は今は松林、牧草地乃至畑として利用されている。

△道川館趾のこと

之まで人の口に上ったのを聞えたことが無い。遺物と云ふやうなものも出ないが、道川神社の近くに台地になってゐるのがそれだと里人が云ふてゐる。また現在、俗に水口かど、茶畑と呼ぶ所があるが、之はその館の名残だと云はれてゐる。現在は雑木林になってゐる。俗に村の人が一階、二階と呼ぶ段階がある。背後に「ハルコ澤」と云ふ所があるが、此處に住人だと云ふ「ハルコ某」の姓をとった地名だと云はれてゐる。

△寺屋布二た所

五十丁小字大平の村居の上五百刈澤へ通ずる道路の側に凡、四、五反歩の長方形の平地がある。此處を寺屋布と呼んでゐる。もと寺があつたさうで、此の中程に径二間半位、高さ四尺位の土饅頭がある。お僧さんの墓だと云はれてゐるが、里人の不思議の一つとなつてゐる。現在杉林になつてゐて男鹿田石井清治郎氏の所有地である。湯の里の村居の東に小高い屋布形した平地がある。俗に寺屋布と呼んでゐる。もと昌東院が此処にあつたとも云ふ人がある。だが又昌東院は白山の旭台にあつたとも云はれてゐるからどうしたものか。現在は畑になつてゐる。」

参考文献

我が郷土（上・下、謄写刷）

上新城尋常高等小学校・上新城農業補習学校
／1931年

宮城県文化財調査報告書第133集 絵馬調査報告書宮城県文化財保護協会／1990年

図説歴史散歩事典
山川出版社／1979年

ふくしまの絵馬（ふくしま文庫・47）

渡辺康芳・著／福島中央テレビ・企画編集
／1978年

本荘市史神社仏閣調査報告書 本荘の神仏像
大矢邦宣・編集執筆／本荘市史編さん室
／1998年

企画展図録 絵馬の世界

山口県立山口博物館／1991年

特別展 絵馬

兵庫県立歴史博物館／1985年

津軽藩の絵馬

財団法人 馬事文化財団 学芸部／1983年

絵馬一祈りの諸相一

和歌山市立博物館／1991年

企画展図録 安房地方の絵馬

館山市立博物館／1992年

久慈市の絵馬

久慈市教育委員会／1997年

小絵馬 いのりとかたち

佐藤・田村・若尾／淡交社／1978年

岩手の絵馬

岩手県立博物館／1985年

福島県文化財調査報告書56 福島県の絵馬一文化財基礎
調査報告書／福島県教育委員会／1977年

山形県の絵馬一所在目録

山形県立博物館／1985年

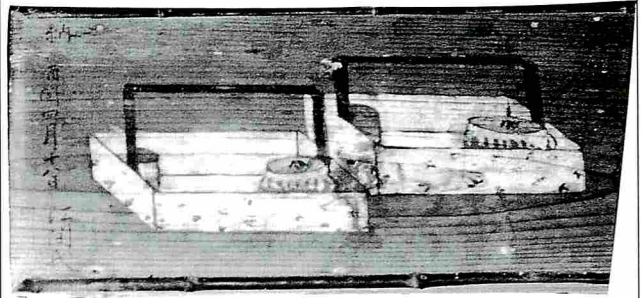
絵馬

岩井宏美／法政大学出版社／1974年

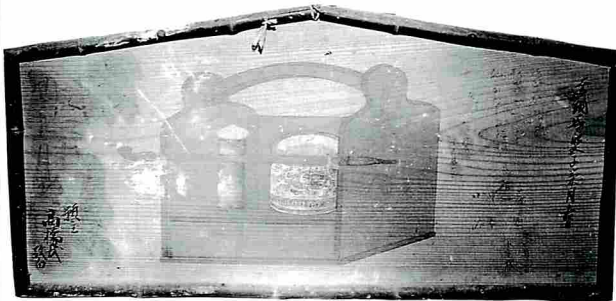
絵 馬 図 版



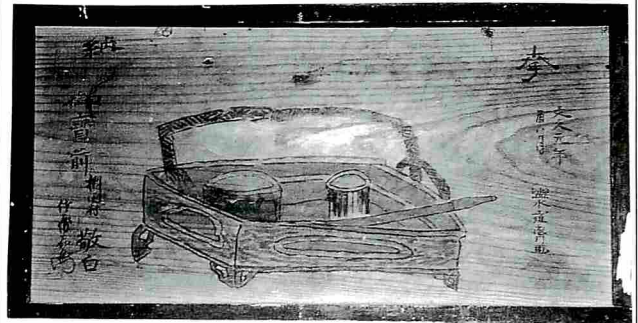
1. 煙草断ち絵馬 (1847年) [7]



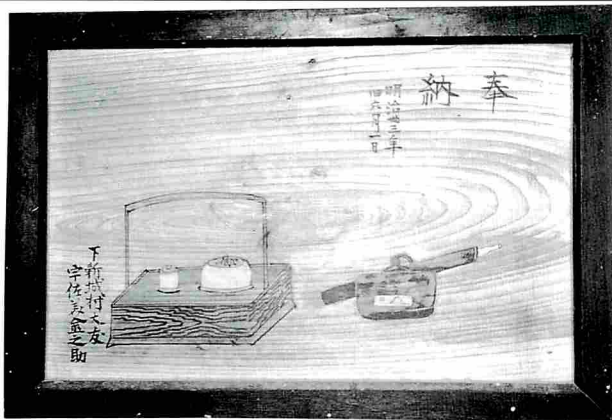
2. 煙草断ち絵馬 (1849年) [16]



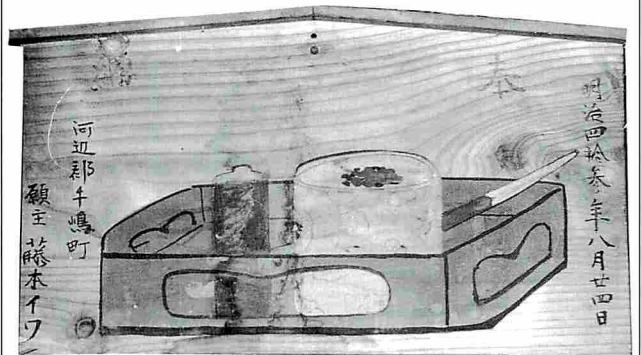
3. 煙草断ち絵馬 (1852年) [8]



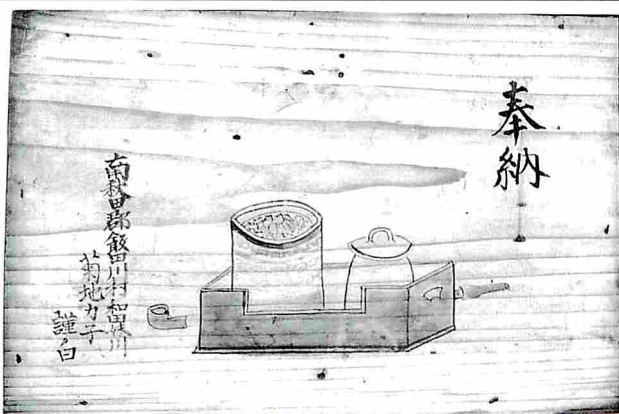
4. 煙草断ち絵馬 (1861年) [36]



5. 煙草断ち絵馬 (1900年) [1]



6. 煙草断ち絵馬 (1910年) [2]



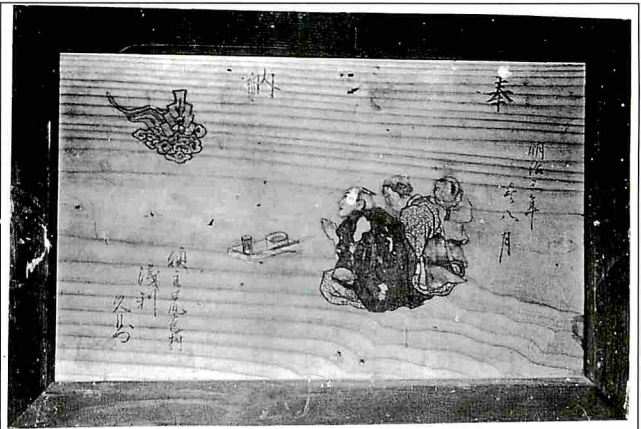
7. 煙草断ち絵馬 [32]



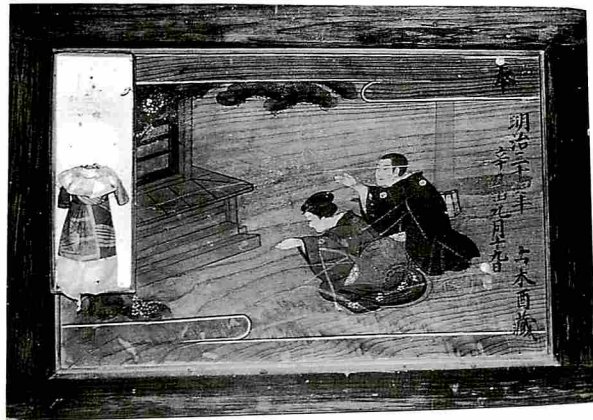
8. 煙草断ち絵馬 (1900年) [31]



9. 煙草断ち絵馬 (1908年) [39]



10. 煙草断ち拝み絵馬 [27]



11. 拝み絵馬 (1891年) [49]



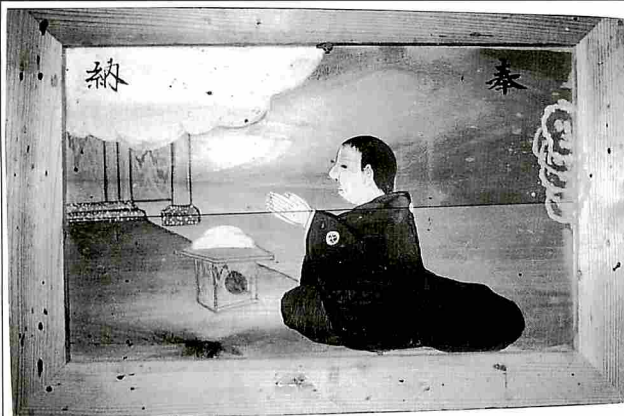
12. 拝み絵馬 (1913年) [42]



13. 拝み絵馬 (1915年) [35]



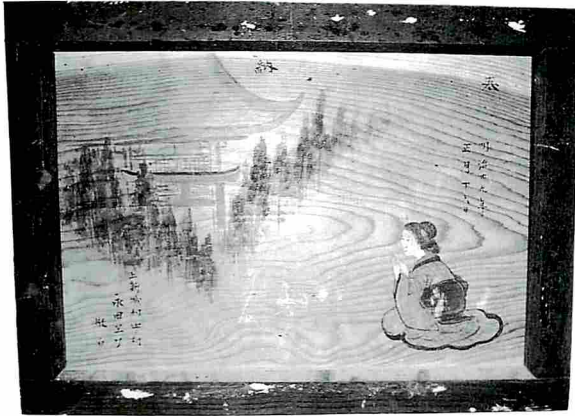
14. 拝み絵馬 (1910年) [40]



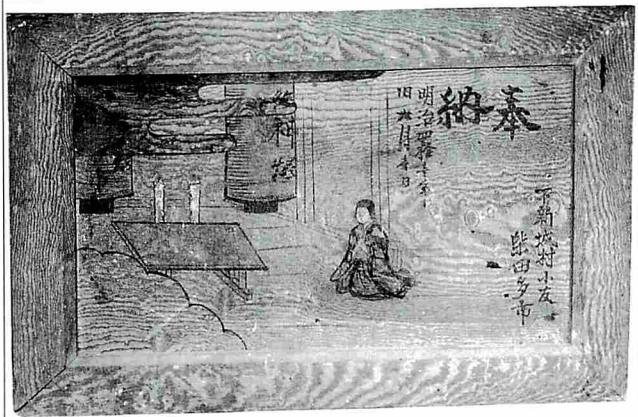
15. 拝み絵馬 [15]



15. 拝み絵馬 (1894年) [46]



17. 拝み絵馬 (1896年) [13]



18. 拝み絵馬 (1908年) [26]



19. 拝み絵馬 (1910年) [3]



20. 祝儀絵馬 (1898年) [22]



21. 社参絵馬 (1895年) [43]



20. 社参絵馬 (1909年) [48]



23. 社参絵馬 (1912年) [23]



24. 社参絵馬 [21]



25. 社参絵馬 (1909年) [34]



26. 社参絵馬 (1887年) [33]



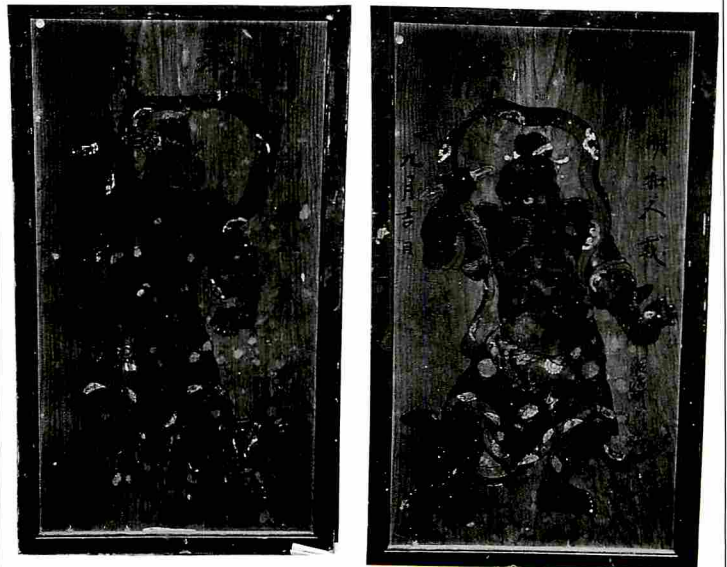
27. 社参絵馬 (1893年) [47]



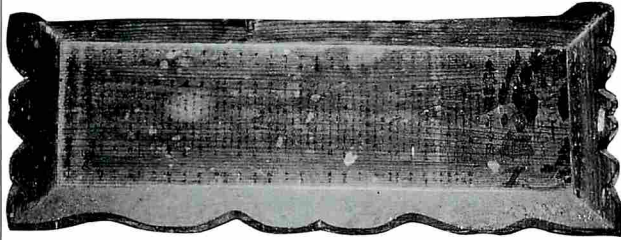
28. 連歌掲額 (1747年) [19] (部分)



29. 連歌掲額 (1754年) [28] (部分)



30. 画題絵馬 (1768年) [29・30]



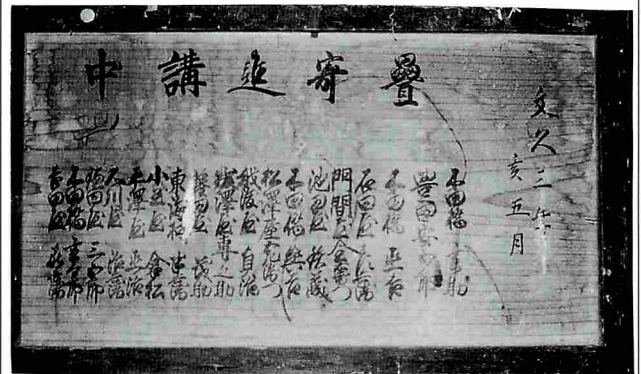
31. 前句附掲額 (1773年) [20]



32. 社額 (1832年) [51] (部分)



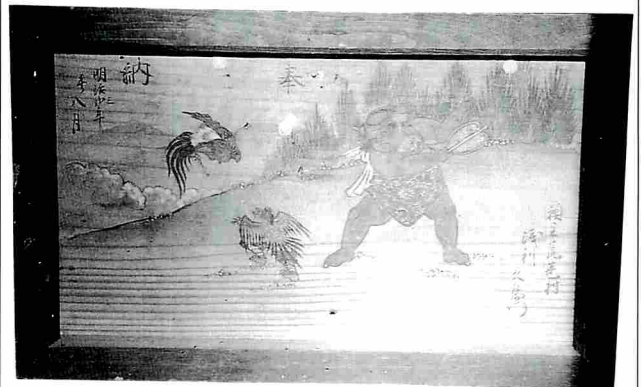
33. 画題絵馬 (1842年) [12]



34. 講中連名額 (1863年) [4]



35. 画題絵馬 (1863年) [44]



36. 画題絵馬 (1870年) [11]



37. 画題絵馬 (1905年) [38]



38. 画題絵馬 [41]

絵馬調査整理表

<拝殿内調査区域順>

No.	図 像	奉 納 年 月	願 主	法 量	備 考
1	手付き提げたばこ盆図 〈火入れ、灰落とし、腰差たばこ入れ（胴乱型）〉	明治33年旧6月	下新城村大友宇佐美金之助	35.7×52.5×1.8	
2	紗綾文透かしたばこ盆図 〈火入れ、灰落とし、煙管〉	明治43年8月	河辺郡牛嶋町藤木イワ	22×39×2.7	
3	数珠掛け婦人拝み図 〈右向き、襦袢地紋彩色、三宝にお供え餅〉	明治43年6月	秋田市下肴町佐藤タノ	17.5×30×2.4	行年45歳銘
4	字額「覺寄進講中連名」	文久3年亥5月	講 中	39.5×68×2.3	土崎港町カ
5	字額・前 句 付	文化元甲子年6月	不 詳	24.5×147×2.0	
6	貼付鉄片鳥居図	明治22年旧6月	上新城村道川那珂氏	76×90×2.7	
7	角型・黒漆塗り内朱塗りたばこ盆図 〈火入れ、灰落とし、煙管〉	弘化4丁未年8月	不 詳	51×80.5×3.7	長谷川永昌筆
8	風覆型・提げたばこ盆図 〈染付牡丹文筒形火入れ、蓋付灰落とし、煙管〉	嘉永5年9月	高 橋 氏	37.5×75.7×1.5	
9	字額・「勉」	明治35年旧6月	上新城村古木才市	28×49.5×2.8	
10	雲に龍図	大正5年旧正月	上新城村道川佐藤善蔵	32.8×43.5×1.6	「歳拾五才」
11	山中金時、烏天狗と雉の相撲図	明治3年8月	荒巻村浅利久左衛門	41.5×66.8×2.4	
12	池庭菖蒲に鴛鴦図	天保13年9月	不 詳	64×95.5×4	
13	婦人拝み図〈左方社殿遠望〉	明治29年正月	上新城村中村永田エソ	53.5×73.8×3.5	
14	山中蛇図	大正8年旧7月	上新城村カ古木ミチ	24.3×36×0.8	
15	男拝み図〈拝殿、三宝にお供え餅一重ね〉	不 詳	不 詳	36.7×54.5×2.6	
16	角型・手付提げたばこ盆二口図	嘉永2年閏4月	江間氏		
17	蛇 図	大正9年旧5月	下新城村岩城安養寺銀助		
18	裸馬二匹図	大正11年旧4月	上新城村カ古木永治	49×75.3×3.5	稲永筆
19	字額・連歌	延享4年6月	松崎弥五兵衛・杉原勇助	48×142×10.0	
20	字額・「俳諧之前句附」・右頭書部に社殿遠望	安永2年6月	俳諧連中	50×128.5×9.0	撰者去人
21	絵馬奉納社参図〈左方社殿遠望〉	不 詳	旭川村濁川船木エサ	34×48.3×2.1	雲山翁昌一筆
22	神前夫婦盃図	明治31年正月	下新城村岩城安田サト	33.8×47.3×2.5	安蘭筆
23	親子社参図〈左方社殿遠望、両親と男児〉	明治45年旧6月	上新城村道川古木喜兵衛	57.4×75×4.1	
24	実物蟹剥製仕立	不 詳	不 詳	44.7×60.9×14.0	
25	山中社殿図	明治30年正月	上新城村道川大淵三八郎	49.7×71.2×2.8	
26	娘拝み図	明治41年旧6月	下新城村小友柴田多市	31.8×49.3×2.7	
27	飛雲御幣に親子拝み図〈左向き、角平型たばこ盆図〉	不 詳	荒巻村浅利久左衛門	42.3×63.4×1.8	
28	字額・前句付〈杉板に紙貼り〉	宝暦4年不詳月	不 詳	46×106×4.5	
29	金剛力士図・左方額	明和5年9月	鍛冶町川端村本氏	99.5×58.3×2.3	
30	金剛力士図・右方額	明和5年9月	鍛冶町川端村本氏	99.5×58.3×2.3	
31	男端座図〈湯飲み茶碗、腰差たばこ入れ（胴乱型）〉	明治33年旧6月	金足村鶏崎高橋鉄蔵	32.5×42.4×1.3	
32	角平置型たばこ盆図〈火入れ、蓋付灰落、煙管〉	不 詳	飯田川村和妹川菊地カ子	24.5×36.3×0.3	
33	母子社参図〈右上鳥居、階段〉	明治20年旧6月	外旭川村笹岡中村タキ	40.8×63×2.8	
34	母子社参図〈左拝殿、子を負う和服の女〉	明治42年旧6月	下新城村笠岡細谷酉松・サト	34.5×44.7×1.9	
35	親子三人拝み図〈左向、拝殿内、両親と男児〉	大正4年5月	飯嶋村上飯嶋保坂熊吉	26.3×36.8×2.0	
36	角盆型・手付提げたばこ盆図 〈筒形火入れ、竹製灰落とし、煙管〉	文久元年8月	柳田村佐藤嘉右衛門	32×60.8×2.5	鹽水雍齋筆
37	箆筒長持図	明治21年7月	大島リノ	30.7×42.5×2.0	
38	恵比須雲龍図	明治38年旧8月	北海道旭川町佐藤七五郎 上新城村五十丁中島善治	41×67.3×3.1	驚翁堂菖菖暁筆
39	母子端座、長角型・提げたばこ盆図 〈火入れ、蓋付灰落とし、煙管〉	明治41年6月	秋田市上肴町鎌田かね	30.5×39.8×2.3	
40	母子拝み図〈左向、拝殿内〉	明治43年旧5月	上新城村道川斎藤さな	30.5×39.3×1.8	
41	浦島子図	不 詳	竹内良之助	49.2×54.5×7.0	洒落斎筆
42	親子三人拝み図	大正2年	上新城村 Sato Kekichi	34.7×63.8×2.7	
43	男女社参図に銭鳥居	明治28年1月1日	不 詳 光谷相沢氏	54.6×76.6×2.7	
44	神功皇后・武内宿禰図	文久3年6月	不 詳	44.2×89.9×3.5	信雪筆・他筆多し
45	長角型・雲捲縁たばこ盆図〈蓋付灰落とし、火入れ〉	明治10年4月	五拾丁村佐藤作治郎	44.2×89.9×3.5	同上裏面
46	男拝み図〈左向き拝殿前〉	明治27年旧6月	新城村五十丁佐藤宇吉	42.1×66.7×2.4	雲山翁昌一筆
47	男児社参図	明治26年	本町四丁目平野氏	39.2×51.8×2.3	
48	親子四人社参図	明治42年6月	上新城村道川古木徳三郎	58.3×75.3×3.2	鏡翁源章筆
49	夫婦拝み図に人形	明治24年9月	古木西蔵	55.5×80.5×2.5	
50	馬 図	不 詳	上新城村道川大淵与七郎	29.3×39.2×2.2	
51	社額・「愛染明王」	天保3年	亀屋・川口屋・金木屋	83.2×185.7×16.5	